

未来につなぐ

国連の最新統計では、日本の森林面積は2500万ヘクタール。国土の69%にもなり、世界平均の31%を大きく上回る。

発展途上国の中には、南米のスリナムのように国土の95%にもなる豊かな森を抱える国もあるが、先進国の中ではフィンランドの73%に次ぎ、スウェーデンと同率の「大森林国」だ。

だが、日本の森の中で、手付かずの森は全体の20%足らず。そのほかは少なくとも一度は伐採され、その後再び

北欧に並ぶ 国土の69%

育ってきた2次林か、人間が植えた人工林だ。

日本では戦後の復興期から高度成長期に多くの自然林が伐採され、杉やヒノキがびっしりと並ぶ人工林に姿を変えてしまった。林業の低迷と林業従事者の高齢化などで、手入れが行き届かなくなった人工林では荒廃が著しい。一方で、国有林などでは、残された貴重な天然林の伐採が進み、生物多様性への影響が懸念されている。

——長く日本の森を見てきて何を思いますか。
「戦後に日本の森は大きく変わった。よくもこれだけ植えたものだと思うくらい杉やヒノキの人工林が増えた一方で、天然の森が減っています。最近の森では、見かける昆虫の数が明らかに減っているのも気になります」
——日本は森が豊かだと言われていますが。
「生物の豊かさなどから見て、日本の南西諸島の森は世界一級です。沖縄県の西表島から鹿児島県の奄美大島や徳之島の森にかけて多数の固有種が生息し、島

青木淳一・横浜国立大名誉教授は、土の中のダニに注目して北海道から沖縄まで日本の森2900カ所を踏破、300を超える新種のダニを発見した。「森のダニボーイ」を自称する青木教授に聞いた。

生物の豊かさ世界一級

森のダニ博士 青木淳一・横浜国大名誉教授



「森が持つ多様な機能に注目して」と語る青木淳一名誉教授

あおき・じゅんいち 35年、京都市生まれ。東大卒。横浜国大教授、神奈川県立生命の星・地球博物館長などを歴任。土壌生物学が専門

——長く日本の森を見てきて何を思いますか。
「戦後に日本の森は大きく変わった。よくもこれだけ植えたものと思うくらい杉やヒノキの人工林が増えた一方で、天然の森が減っています。最近の森では、見かける昆虫の数が明らかに減っているのも気になります」
——日本は森が豊かだと言われていますが。
「生物の豊かさなどから見て、日本の南西諸島の森は世界一級です。沖縄県の西表島から鹿児島県の奄美大島や徳之島の森にかけて多数の固有種が生息し、島

——懸念材料は。
「動植物の宝庫である沖縄北部の森林地帯などで、天然林が伐採されている姿

——何がいけなかったんでしょうか。
「森の木を材木だとしてか、思っておらず、森が持つ多様な機能に注目していません。森の中には木の実など



沖縄・やんばるの森



固有種の生態系支える

しっとりとした空気を震わせてあちこちからセミの音が響く。うっそうとした樹冠から差し込む日の光が、巨木がまとう分厚いコケの上の水滴をキラキラと輝かせていた。

「これがオキナワラジロガシ。イタジイとともに沖縄の森を代表する巨木の一つだ」と、やんばるの森に詳しい金井塚

務さんが、巨大な板根を持つ木を指さす。
「オキナワラジロガシの巨木のうろ(空洞部)はテナガゴカネやケナガネズミなどのすみかにな

だが、この美しい森からほど遠くない場所に、やんばるの森のもう一つの顔があった。

「こうして切られた木の多くはパルプチップと

「やんばるの森の将来を、この地域に住む人々が考え、議論する必要がある」と言うのは琉球大農学部与那フィールドの高嶋敦史・助教。貴重な生物のためにどこを守り、地元住民の暮らしのためにどこを利用するのかを決める「ゾーニング」の検討のため国頭村が設置した検討委員会の委員の一人だ。



④緑豊かな「やんばる(山原)」の森。大きな「板根」が特徴のオキナワラジロガシの巨木が息づく⑤「やんばる」では森林の伐採も進んでいる



「やんばる」の森をすみかにするヤンバルクイナ⑥ヤンバルテナゴコガネ⑥



「行政も地元住民も動き始めた。地元が将来像を描き、保護や持続的な利用につなげないといけない」。緑輝くやんばるの森を見詰め、高嶋さんはそう話した。

る。やんばるの生態系を支える樹木」と金井塚さん。

広範囲に伐採された山林が幾重にも重なり、枯れ枝と大きな切り株が乾いた地面を覆う。その近くには沢筋に沿って森林が伐採され、むき出しになった作業用の道が崩落、近づくことすら危ない場所もあった。

して出荷される。国の補助金がなければ成り立たない形ばかりの林業によって貴重な天然林がどんどん伐採されている。環境保護団体「日本森林生態系保護ネットワーク」代表の河野昭一(京都大名誉教授)が語気を強めた。